



## 中島敦「山月記」の学習指導にあたって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 片山, 一良 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/0002000390">https://doi.org/10.32150/0002000390</a>

# 中島敦「山月記」の学習指導にあたって

片山 一良

キーワード 読解指導 教材研究 制度化された読み 思考停止 作品論 教材価値 自己劇化

## はじめに

高等学校国語教員の職を退いて5年たつ。この5年間、札幌市少年育成指導員として市内のゲームセンターや公園を巡回し、児童生徒への声かけ・指導を行ってきた。その一方、可能ならば将来再び教壇に立つ機会を得たいと思い、現代文や古典の定番教材と言われる作品を中心に教材研究を細々と続けてきた。その際、現任教員時代とは異なる視点から作品を読み解き、考えたこともあった。そこで、本稿では「山月記」の教材研究を通じて考えた授業改善のための私論を述べたい。

## 1. 「山月記」の教材価値と私の課題意識

拙論「中島敦『山月記』教材化の調査研究」(2004年1月北海道教育大学大学院 教育学研究科 教科教育専攻 国語教育専修 修士論文)で示したように、当初、児童生徒が社会で生きるための正しい規範意識や内面を持たせるために、その効果的指導が教員に求められた。国語教育においては「作品を道徳的に読む」ことが「制度化した読み」となって無意識・無批判に行われた。

社会の変化にもかかわらず、授業改善に取り組む一部の教師を除き、教科書編集、指導書、設問は定番化し、そして制度化しているのである。言い換えれば、青年期の学習者の現在や将来を考える教材として李徴と学習者自身を相対化し、学習者の人間形成や人間理解が促進していくことを多くの教室で期待されたままなのである。

しかし、そうした読ませ方、読まれ方を私は一概に否定はしない。私たちの個人的な読書体験の多くは作品世界と自分の生きる現実が異なっていることを分かり切りながら、作品世界に没頭したり登場人物に自己投影したりする。そして、共感や教訓を得たり反発したりしながら読まれるからである。そのきっかけとなるならばそうした読書体験も意味があるだろう。

一方、教室内の読書体験は個人的というより「場」の読書である。それゆえ制度化された読み方により、その「場」かぎりの定型化した読み方、「山月記」の場合、自意識の強い男の悲痛な告白を読み取り、そこから青年期にありがちな自尊心や羞恥心とどのように折り合いをつけながら実生活を送っていくか、というもってもらい言辭が結論の授業で終わり、その後の個人的な生活においては「ああ、虎になった男の話ね。」で通り過ぎる作品としてしまうのは残念である。

国語教育的な読みが文学研究に偏在していながら、はっきりと自覚されずにいるのである。読書が制度化するのは、こういう時だ。こうした思考停止から自らを救う手立ては、それを自覚することしかない。(中略)

私達は文学教育の中で、いつも「作者」に出会うことを強いられていたのだ。それが、教科書の中の読書なのである。こうした制度化された読書を脱構築するためには、パターン化した「学習」や問いに対して、テキストの読みのプロセスを対象化することによってゆさぶりをかけるしかない。

(石原千秋 「教科書の中の『山月記』」『海燕』第10巻第10号 一九九一・一〇)

20年以上前に石原の述べた「思考停止」は、今でも我々多くの国語教員にはもちろん、学習者にも生じて

いるのではなからうか。そこでパターン化した『学習』や問いに対して揺さぶりをかける授業を構築できないか、「山月記」においてはその背景となる時代を念頭に読むことで新たな李徴や袁惨の人物像を描くことはできないか、それを学習者に問いかけ考えさせながら読ませたい。これが私の意識に常にある課題意識の一つ目である。

そして、次のような記憶がある。1990年8月に全国高等学校国語教育研究連合会第23回研究大会札幌大会が札幌厚生年金会館などを会場に市内で開催された。この日、全体会の提言者として蓼沼正美、小牧高専教授と亀井秀雄北海道大学文学部教授が登壇し、「山月記」の読み方について会場に集まった全国の国語教師の前で語った。私もその場において記憶に残っているのだが、最後の会場との質疑応答の底辺に流れていた聴衆の思いは「ご高説は承ったが、それを実際の授業にどのように生かせばよいのですか」という冷淡な反応、言い換えれば、大学の研究室での成果は高校の教室とはほぼ無縁ですが、という受け取り方だった。私はこの体験から得たのが、研究者の「読み」の成果をどうすれば日頃の授業に少しでも活かすことができるのだろうかという二つ目の課題意識である。

以上「山月記」は、李徴の語り方と内容、袁惨の役割、語り手の語り方、本文に用いられた言葉から読み取れる背景から発問し、考えさせることによって、学習者の思い込みを揺さぶり新たな読みと読み方の発見に導くなど、本文に従った多様な読みとその享受を教室において可能にするという教材価値がある作品である。次項以下で私の二つの課題意識を底流に、下記の観点からどのように授業を展開していたか、そして今後展開してみたいかを述べたい。

## 2. 「山月記」読解指導にあたって 読解上の課題と学習目標

### ① 冒頭の漢文調に対する生徒の抵抗感を減らす。

「山月記」の授業第一時。生徒ではなく、授業者が全文を一気に朗読する。朗読に際し、小説世界に感情移入しすぎると聞いている生徒は「引いて」しまう。そこでそうならないギリギリのライン、具体的にはおおげさな抑揚をせず、間を大切に語り手や李徴の説明や思いを淡々と語るようにする。そうすることで生徒の多くが真剣に授業者の朗読に聞き入る。

第一段落の読解は冒頭から続く漢文調の表現に対する学習者の抵抗感をどのように緩和したらよいか課題であるが、この朗読により生徒はスムーズに物語世界を味わってくれる。

こうして授業者の朗読が終わると、簡単な内容の確認をする。ここでは「主人公が虎になって苦悩している話」程度でかまわない。そして第一段落の読解に入る前にこの段落を生徒たちに読ませる。ただ一人一人に当て読ませるのではなく、授業者が区切りを入れた文節ごとに2人ペアにして区切り読みさせる。

ペア同士の練習、列ごとの発表、ペアの発表と進め、最後に第1段落の読了時間を競争させる。過去にこの取り組みを生徒にさせた際、生徒は意外と意欲的に取り組み、教室は盛り上がった。

この後に主人公李徴がどのような人物であったのか、性格、経歴を整理して理解することが学習者には容易に進められる。なお、この整理を板書で行くと生徒はノートにそれを書写するのに集中してしまう。そこで「パワーポイント」を利用し、顔を上げさせて内容を順に整理したい。そしてこの部分は資料1「李徴の経歴」のようにまとめプリントにして配布する。

### ② 「月」の描写について

「月」の描写は物語世界の時間の経過を表すとともに、李徴の人間性が失われていく様子が読み取れる。そして、その描写は作品の前半、途中、終盤に置かれている。そのため、この働きを作品指導の中で扱うタイミングが私には悩ましかった。李徴の告白の読解の流れが、「月」の描写の読解を扱うことで途切れてしまうか

らである。そこで、作品を最初に通読した後に整理する方が生徒の考察、理解が容易だと思われた。第一時に作品を全文範読する前に月の描写に気をつけることを指示し、範読後、生徒に発表させ、資料 2「月や周囲の描写」のように整理しながら気づくことを発表させて生徒に読解させたい。

### ③ 詩家としての大成をめざすことについて

第一段落の読解にあたり気になるのが、李徴が詩家として名を成すつもりでいることが読者、特に学習者である今の高校生に説得力があるのかという点である。エリートである役職、安定した生活を捨て去り、詩人として死後百年に名を残そうとする李徴の考えを、今の生徒たちは疑問なく受け入れられるのであろうか。「有名になることは大切なことか」「なぜ名を残すための職業が詩人なのだろう。」「ほかに有名となる職業はなかったのか。」「有名な詩家になることは当時の人にとってどれほどその自尊心を満足させるものだったのだろう。」

この点は生徒同士での話し合いの時間を設定し、もし、生徒たちが有名になりたいとしたら、どういふ職業をどのような過程を経て実現したいと考えるだろうか、「有名になる」とはどういうことだろうか、と話しあわせたい。中には「有名にならなくてもよい」という考え方を持つ生徒もいるはずだ。その理由を発表させることにより、李徴と正反対の生徒の人生観がうかがわれるだろう。ただし、官を辞し背水の陣で詩作に励んだ時期の李徴や人間としての死を目前にした今の李徴と、まだまだ人生に先があると確証なく疑わない生徒との間には切実さに差がある。その点に留意しながら詩家として名を成そうとする李徴の「執着心」の強さを想像させたい。

ところで、唐代における「詩」の創作の目的は非常に政治的であったという。

「行卷」というのは、科挙(進士科)の受験者が自分の文学作品に手を加えて、清書して一巻にしたうえ、試験の前にそれを当時の政治・社会・文壇において高い地位を占めた人たちに送ったもので、彼らから主司、すなわち試験を主催する礼部侍郎に推薦してもらうことによって、合格の可能性を一層高めるための一つの方法であり、作品によって自分を売り込む手段であった。

(「科挙について 唐代の文学と科挙の関係」山口勝巳 茨城大学 人文学部人文学科中国文化専攻インターネットから引用)

李徴の場合、過去に進士に合格しており、官職を辞せずとも、そこで得た詩人としての李徴の知己とその評価をもとに作品を発表しつづけられたはずだ。その結果「長安風流人士」の机にその作品がおかれた可能性もある。しかし、彼はそのアドバンテージのある立場の官職を「下吏に甘んずるを潔しとせず」捨て、故郷に戻り、さらに「羞恥心」と「自尊心」の間で揺れ動きながら、知己との切磋琢磨はもちろん、交流もしなかった。みずから自分の作品を死後百年に残す当時の方法による機会、詩家として大成する手段を手放し、ある意味近代的な李徴個人の才能を発揮した作品を作り続けたのである。

生徒にはこうした当時の詩の社会的・政治的背景を押さえて、李徴の求めた「詩」への執着を理解させたい。

### ④ 袁愔の人物像

作品内では袁愔の人物像について、周知のように次のように紹介されている。

袁愔は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少なかった李徴にとっては、最も親しい友であった。温和な袁愔の性格が峻峭な李徴の性情と衝突しなかったためであろう。

ここから袁倬は「温和で優しい」という人物像が読み取れる。これは誤ってはいないが、他にも本文の記述から読み取れる情報に注意させたい。たとえば、進士に合格していること。ここから袁倬も超難関な試験を乗り越え、官吏となった優秀な人物であることがわかる。同僚や先輩の官吏を「鈍物」「俗悪」と蔑んだ李徴にとって親しく交際した袁倬はそうした者たちとは異なり、職責に使命感を持った有能な人物だったのだろう。

また、袁倬の現在の地位が「監察御史」であることも重要な情報だ。この仕事は官吏の不正を暴き、正す仕事だという。それならば不正を働く地方官吏を厳しく咎める正義感や情報収集力、交渉力も必要になるだろう。おとなしく「温和」な男であるだけでは務まらない職務と言えよう。

この確認は李徴の告白の聞き手としてのみ長い間定着した袁倬が、実は無言ながらも鋭い批評力を持った人物として再確認されることになる。そして、李徴が口述する詩作品への批評「第一流の作品となるのには、どこか(非常に微妙な点において)欠けるものがあるのではないか」が単なる個人的な感想以上の意味を持つてくるのではないかと思う。

ともあれ、袁倬が李徴と再会する場面は、袁倬自身の人間像を推察する手がかりが、直接彼の人柄に触れた文言だけではなく、袁倬の経歴、地位の記述にもあることを生徒に気づいてもらい、資料 3 のようにまとめながら登場人物の理解を深める手がかりとして触れたい。

## ⑤ 李徴の作品にある「非常に微妙な点」について

「非常に微妙な点」とは何かと学習者に問うことは本来ナンセンスなことだろう。なぜなら、他の言葉で説明ができないため「微妙だ」と述べているからだ。しかし、読者にすればそれは何だったのだろうと自然に考えてしまう。語り手の読者への答えなき「仕掛け」となっている。この仕掛けに乗って行間を読んでもみるのは教室における小説読解の楽しさであろう。

過去の指導記録ではこの「微妙な点」をあえて生徒に想像させ、「李徴の人間性に欠けた性情がもたらす弱点」と集約する実践が多かった。それも自由な読み方の結果としては否定しないが、てがかりがない以上、それのみを結論として生徒に提示することは避けたい。書かれてあることをまず手がかりに想像させたいものである。

それよりも、袁倬はもちろん、その内心をも表し得る語り手も、「微妙」とのみ言い表し、明確な欠点を述べなかった理由は何だろうかと思えなさい。

李徴が記憶にとどめていた「詩数十篇」はいずれも「格調高雅」「意趣卓越」だった。語り手は袁倬という聞き手を通し、作品をそう評価する。それが、先述した当時の詩作品の政治的意味を十分知っているはずの李徴が、あえてそれを捨てて求めた「理想」の詩作品だったのであろう。自己満足に陥らず、読者を感動、共感させ、ひいては李徴を一流の詩人として「文名を死後百年に遺す」価値を内包した作品を追い求めたものにちがいない。しかし、残念ながら体制側の高位高官である袁倬と当時をよく知る語り手には、「どこか(非常に微妙な点)において」としてしか表現できない「欠ける」何かがあったのだろう。私はそれは政治的な役割を持つ当時の詩作品としての価値あるいは当時の詩作品が一般的に内包していた雰囲気ではないかと想像している。李徴が当時の詩作品にあった政治的しがらみを遠ざけ、その意味で近代的な自己発現を詩作品に求めたことは、その時代を生きる袁倬には理解説明のできない、それこそ「微妙な」違和感だったのではないだろうか。

いずれにせよ「微妙な点」と曖昧にしかできなかったのは、袁倬にも語り手にも言語化できない何かの欠けているのだという事実を述べると同時に、生涯執着し異物となっても記誦していたその作品なのに欠点があり、それを李徴は知らずにいってしまうことを読者に伝えているのだ。

ところで、もし、李徴にどこか欠ける点があると伝えていたら、李徴はどう思うだろうか。このようなことを生徒

に考えさせるのも面白いかもしれない。李徴は自信を砕かれさらに傷つき嘆き悲しむだろうか。それともさも  
ありなんと達観できるだろうか。

李徴は詩の伝録を依頼する際「何も、これによって一人前の詩人面をしたいのではない。作の巧拙は知ら  
ず、とにかく、産を破り心を狂わせてまで自分が生涯執着したところのものを、一部なりとも後代に伝えないで  
は、死んでも死にきれないのだ」と述べ、「巧拙」よりも「執着」を優先している。「文名を遺すため、名声欲か  
ら詩作に励んだ時とは異なり、虎となり果てそうな今、人間だった証として己の詩を記録してもらいたいという  
執着心が李徴を支配しているのだ。かつて己の詩業に半ば絶望したことのある李徴にとっては己の詩作品  
に、言葉にできぬ「非常に微妙な」欠けるところはあって当たり前で驚き、傷つくこともなかったかもしれない。  
それが理由で名を遺すことができなかつたとしたら、かえって微妙な点が明確になるよう袁愔に批評を求めた  
かもしれない。虎になろうとする今は「臆病な自尊心」はないのだからこうした批評を袁愔から受けることは可  
能だ。少し脱線してしまったが、作品からこのようなことを生徒に想像させることも可能だろう。

## ⑥ 李徴の「自嘲癖」について

生徒に「自嘲」の言葉とは日常生活の中であったならどのような言葉になるか言わせたり、想像させたりして  
みる。そして身の回りに「自嘲癖」のある友人がいたならば、その友人にどのような言葉をかけたり、思いを持  
ったりするかと問いかける。

「俺は馬鹿だ」と自嘲する友人に「そうだお前は馬鹿だ」と言うか「いやそんなことはないぞ」と慰め励ますか、  
どちらの態度を示すかと問うてみる。すると、生徒たちの多くが「慰める」と答える。いうなれば自嘲は、その言  
葉を口にする人が自身を卑下すると同時に、それを聞く人に卑下した内容を否定してもらうことを暗に期待す  
る言葉ではなからうか。つまり、李徴の自嘲は自尊心の裏返しであると同時に周囲の人への甘えなのである。

彼は「かつて郷党の鬼才と言われた自分に、自尊心がなかったとは言わない。しかし、それは臆病な自尊  
心とでも言うべきものであった。」と言う。つまり、李徴は難関の科挙に合格できる己の才能、素質に自尊心を  
持ちながら、一方でそれが詩作の面では第一流のものであるか、彼自身には自信がなつたのである。だから  
李徴が自嘲するのは、その不安を打ち消すために周囲からの否定や励ましを期待していたのだろう。

だがこうした態度が続くと周囲の人も「ああ、また始まったか」と呆れ、まともに相手にしなくなる。李徴は自  
分を敬遠する人々を語るに値しない人物であると見下し、拒絶するか、あるいは自分の本当の実力を見抜い  
ているのかと恐れ、交わりをせず、孤独になる。

李徴が「官を辞した」理由を、彼が周囲を見下し、自身は詩人として名を成すためであったと語り手は第一  
段落で述べているが、李徴の「最も親しい友」であった袁愔は、その対象ではなかつた。それどころか、語り  
手が知りえない李徴の周囲の人々の彼への思い、評判を知っていたはずだ。周囲から次第に敬遠されて官  
を辞職し、その後孤独と絶望の果てに虎に変身してしまった。それなのに今でも彼には彼自身を孤独に導き、  
正当に評価されない遠因となつた「自嘲癖」が残っている。それゆえ「悲しく聞いていた」のではないだろうか。

生徒には李徴が自嘲する意味やそれが周囲にどう影響し彼に跳ね返つたのか、そして袁愔がなぜそれを  
「悲しく聞いていた」のかを想像させたい。

## ⑦ 李徴の即席の詩について

この詩を詠む前に李徴は「お笑い草ついでに、今の懐いを即席の詩に述べてみようか」と語る。この言葉  
を踏まえながら、その「懐い」はどのような内容か生徒に考えさせたい。虎となつたこと。そしてその後人語に  
語れぬ経験をしてきたこと。その姿のままかつての友人と再会していること。こうした詩に詠まれた内容を踏ま  
え、即席の詩のどこにそれが表されているか、確認させる。そして、その背後にこめられた「懐い」を一つ一つ

確認したい。

留意したいのは、先の言葉である。つまり、即興の詩を詠む直前李徴は詩の伝録を依頼する自分を自嘲しており、その気分の流れが即興の詩にも現れているということだ。

《首連》虎となった原因は病気＝「狂疾(精神病)」であり、そこに「災難」が重なったため、現在の境遇から逃れることができない、運命に抗えないと述べる。「災難」を「ふりかかった不幸なできごとを個人的、運命的にとらえた言い方」(Goo 辞書)と解釈すると、ここでは具体的には「殊類」になったことを指すだろう。病気は第一段落で語り手が述べた、李徴の発狂にいたるまでの激しい苦悩を指す。李徴が陥った運命への絶望感が読み取れる。

《頷連》己の「爪牙」によって人を食って今あること。ここには虎となった己の力を誇示しているが、その実はそうした人食い虎として生きる自分への自嘲の思いが投影されている。

《頸連》そんな自分とかつて秀才としてともに評判が高かった友人袁慆と出会う。雑草の中で生活している自分と馬車に乗って責任の重い仕事をしている友人を比較する。ここにも栄達した友人とは真逆に、獣として暮らす己への自嘲の思い、と同時に友人への羨み、妬みの気持ちが読み取れる。

《尾連》自分は今の懐いを詩に吟じようとしても、虎として吠え叫ぶことしかできない。ここは人間として生きることができない絶望の思いを、月に向かって咆哮する虎の姿によって象徴的に暗示している。しかし、ここでもそのような虎となった自分の孤独な姿への自嘲の思いが読み取れる。

このようにこの即興の詩に込められた「今の懐い」とは、まず絶望感ではあるが、そうした状況に陥った己を自嘲する李徴の冷めた、そして他者の同情を期待する、甘えた心性が読み取れる。

この「懐い」が先に口述した他の作品にも影を落としていたかどうかは、他の作品がないため明確にはわからない。わからないが「素質が第一流に属する」と袁慆に言われていることを踏まえると、自嘲癖が他の作品にも表れていたとは考えにくい。李徴が今現在の姿と境遇を思い、即興で詠んでできた詩と、人間であったときに推敲を重ねて作った作品では作詩の動機が異なるからだ。

即興の詩は李徴の詩人としての才能を測るてがかりとはならないことを生徒に指摘したい。

## ⑧「尊大な羞恥心」と「臆病な自尊心」の指導について

李徴が己の内心を表すのに用いたこの二つの文言は、どの教科書でもどういうことを示しているかが「学習のポイント」として問われる。その意図は「臆病な羞恥心」と「尊大な自尊心」ならばそれぞれの形容動詞と名詞の意味が同方向を向き自然であるのに、なぜ逆方向の言葉どうしを組み合わせているのか、その理由と表現の巧みさの理解を生徒に求めることである。

そのためには、第一段落においては己の才能ゆえに「賤吏に甘んずるを得な」かったことと周囲の人間の俗悪さへの嫌悪から官を辞し詩家をめざしたが、その努力が実らず、節を曲げて一地方官吏の職を得たという、いずれも「自尊心」が原因となる行動だったという語り手の言葉の理解と、第七段落において故郷で人との交わりを避けていた時の心境を告白した内容、すなわち人との交わりを避けたのは、己の珠にあらざるを恐れ、己の珠なるべきを半ば信ずるがゆえだったという李徴の内心の真実という、外と内の両面から彼の「自尊心」をとらえて理解する必要がある。つまり、この文言は李徴の強い自尊心と繊細な羞恥心という内心の二面性が、彼の態度としては李徴の他者への臆病さとそれを悟らせないための尊大さとして、同時に現れていたことを示した表現なのである。そうした自身の内心を巧妙に表現したのが、「尊大な羞恥心」と「臆病な自尊心」なのだとして生徒に理解させたい。資料4

## ⑨李徴は非人間的か

私は「李徴はなんと人間的ではないか、非人間的などではない」と生徒にまず訴えるところから始めている。「いったい李徴のどこが人間らしいんだ」「李徴は自分のことしか考えていなかったから虎になったのに」という反発や疑問が生徒に生じることを意図している。

たしかに己の詩への執着のために妻子を傷つけ、己の外形まで獣に変えてしまったところに、李徴自身も読者も彼の「非人間性」を認める。異常な執着心から人間に非ざる獣に変身してしまったところは「非人間」的ではある。しかし、彼が「妻子の衣食のために」官吏に再びなったこと、作品の最後に「この道を二度と通らぬよう」哀惨に伝えているところはどうかと指摘すると、彼の人間性を生徒は発見することになる。

そもそも「非人間性」とは我々人間の行いのどのような面を呼ぶのだろうか。生徒にはそこから考えさせたい。なぜなら我々人類の歴史を振り返ると、「非人間」的な行いは枚挙に暇がないからだ。そうした事例と李徴の人間であった頃のふるまいを比較すると、確かに李徴は「狷介」ではあったがスケールが異なることに生徒は気づくだろう。

さらに「人間性」とは何か、それを表す言葉を発表させる。自己を尊重すると同時に他者をも尊重すること。非暴力、思いやり、助け合い、愛情、それらの裏側にある、自己中心性や暴力性、憎しみ、妬み、蔑み、欲望。そこまで意見が出れば、こうした誰の心にも多かれ少なかれあるであろう、もろもろの心性すべてを含んで、我々は「人間的」なのだとして生徒は理解する。だから、李徴はその意味ですこぶる「人間的」であったとは言えるのだ。そして、「人間的」であることと「非人間的」であることは別個のものではなく、重なる部分があることにも最後に生徒は気づくだろう。

また、彼が仕えた「天宝」の皇帝は玄宗である。晩年、政治に飽いた彼はその息子の妻だった楊貴妃を奪い取る。しかし、「安祿山の乱」のため長安を捨て逃亡する際に、身の安全を図るために彼女を側近に縊殺させた。また、乱の後、唐帝国を打倒した一族は肉親同士の血で血を洗う権力闘争をした。世界史の授業で「安祿山の乱」を、古典の授業で「長恨歌」を学習しているならば、このことを生徒に質問してみたり、紹介したりする。あるいは世界三大美人の一人は誰かなど彼女に関わる雑学から問うところから説明していくと、興味を示す生徒が多い。そこから「山月記」を読み返すと、李徴の人生における苦悩は逆に何と人間的ではないかと生徒に理解してもらえるだろう。

#### ⑩李徴の告白の「自己劇化」について

蓼沼氏がその論文『「山月記」自己劇化の語り』（『国語国文研究』北大国文学会 1990,12 以下同様）で指摘され、李徴の告白を真正直に受け止めてよいのだろうか、李徴の語りには自己劇化するかわち、「人間が人間として生きられる最後の瞬間に、自己を対象化する言葉を語りながらも、なお、劇的に自分を仮構せずにはいられない」（同氏論文より）のではないかという、告白の真実性を留保する考え方が現れた。これは極限状況にある主人公の語りを、等身大の真実の告白と受け止めて理解してきた教室での読み方に、大きな一石を投じたことになる。

他の様々な「山月記」研究がある中で、恣意的ではあるが、私はこの解釈を授業で生徒に紹介することで、定番となった「山月記」の読み方をひっくり返し、これまで知らなかった読みの可能性に触れる機会としたいと思う。

この論文が発表されて以降、現実に教科書や授業実践者が蓼沼氏の解釈を踏まえた教材化、教材研究、実践の動きをしたことはないように思う。私も行ったことはない。なぜなら、李徴の語りが自分を劇化した仮構のものであるとするならば、授業では李徴の語りから何を課題にして授業を組み立てるとよいのか、「山月記」の教材としての価値を考え直さなくてはならないからだ。

確かに、従来の解釈を全否定し蓼沼氏の解釈だけを教えることは、それも読みの硬直化であり、極論であ

る。それゆえ、読みの一解釈として、それも従来見過ごされていた観点から李徴の告白に切り込み、読みの「常識」からひいては日常生活に潜む根拠なき「常識」を疑う姿勢に至るきっかけにできないかと考えている。

蓼沼氏によれば、虎に変身して袁慆に出会うまでの1年間、李徴は人語を操ることのできる時に、人間であった頃から虎になってまでの状況や運命を繰り返し考え、言葉で認識しようとしたはずである。それゆえ、袁慆に「どうして今の身に至ったか」を尋ねられた時、最後に「分からぬ何事もわれわれには分からぬ。理由もわからずに押し付けられたものをおとなしく受け取って、理由も分からず生きてゆくのが、我々生きものさだめだ。」と説明しているが、これがこの1年間李徴がたどり着いた終局の自己認識であり、袁慆と会話して初めて言葉として外在化したもののはずだ。

それなのに、李徴は「ところで、そうだ」と思い出したように「詩への執着」を語り、虎に変身した理由を語っている。それは「自己を対象化する言葉を語りながらも、なお劇的に自分を仮構せずにはいられない。しかもそうやって自分を演出してしまうことよりも、演出した自分にしか自覚的になれない」でいる結果なのだ、という。

そして「山月記」という物語が語る本当の「恐ろし」さも、実はそこにあると言える。人間が人間として生きられる最後の瞬間に、自己を対象化する言葉を語りながらもなお、劇的に自分を仮構せずにはいられない。しかもそうやって自分を演出してしまうことよりも、演出された自分にしか自覚的になれない人間の愚かしさ。突き詰めて言えば、自分が何を語っているのかもわからぬまま、虎になっていかなければならない(=人間として死んでいかなければならない)「悲劇」を「山月記」は物語っているのである。

(「国語国文研究」北大国文学会 1990,12)

さて、繰り返しになるが李徴が袁慆から「どうして今の身になるに至ったか」と尋ねられ、その答えとして、きっと虎となったこの一年間、人語によって身に降りかかった出来事の意味を考え抜いた結果を、はじめて他者に対して明確に言語化して語った言葉、すなわち「わからぬ。まったく何事も分からぬ。理由も分からずに押し付けられたものをおとなしく受け取って、理由も分からずに生きていくのが、我々生き物のさだめだ。」が、李徴のそもそもの自己認識であったはずだ。そして、その後「ところで、そうだ。」と、以下思い出したように詩への執着とその結果が虎に自身の身を変える原因となったと語るのは、今袁慆と再会した時に思い浮かんだからで、先の1年間では考え及ばなかったことだと読み取れる。もし、考えたことがあれば、先の袁慆の問いに対し、詩への執着や妻子への非情さが原因であったと述べているはずである。

詩の伝録を依頼して以降、李徴は自身をドラマ化するかのように誇張に富んだ表現を選んで語っている。それらの言葉はこれも、最初の自己認識であった「生き物のさだめ」を踏まえた自己認識の中にはなかったことを李徴は自覚していないのである。

そして、少なくとも私もこの最初の自己認識の言葉は、詩への執着とその内心を語る言葉を読解の重点としたために消し去られ、せいぜい袁慆と再会した興奮から口端にのぼった思い付きの言葉ほどの意味しか感じられなくなっていた。そこがこれまでの私にとって落とし穴だったのである。思考停止していたのである。

「ところで、そうだ」以降の李徴の告白は、袁慆と今ここで出会ったゆえに改めて己の悲劇性を自覚し語り始めた自己認識の言葉ではある。けれども「初めはそれ(他のもの)を覚えているが、しだいに忘れてしまい、初めから今の形のものだったと思い込んでいる」という当初の自己認識から考えると、虎になった李徴が袁慆に人語をもって語るそのこと自体が人間であった彼の存在証明なのであり、自己認識なのである。ところが李徴はその認識、すなわち自分の今の境遇は「生き物のさだめ」の結果であり、「今の形」の前を忘れ去る前に他者に人語で語るができることこそが、人であったことの証明なのだ、を忘れ、自己の悲劇性に「酔」って人間であった時を振りかえっているだけなのだ。どれほど虎になったことの原因を、詩に執着し妻子へ非情

だった人間であったからだ」と当時の自身を語っても、虎になったことを「さだめ」と結論づけていたことを踏まえると、後付けの自己劇化した語りなのであった。

それでは、この解釈をどのように教室に落とし込めばよいだろうか。

私がこの告白の自己劇化に教室で触れるならば、李徴が妻子の保護を袁慆に依頼した場面を終えたあとに、次のように話し出したい。

「これまで、李徴の告白についてその心情表現を読み進めてきたが、この小説の最先端の研究の一つを簡単に紹介したい。それは、李徴の告白は自分自身をドラマ化し、実際にはないものをあつたように想像で作りに上げてしまった(仮構した)もので、そのまま信じるのは誤っているのではないか、という研究です。この論文は多くの研究者から従来なかった「山月記」の読み方として評価され、有名です。いったい作品内のどの言葉からそんな解釈が生まれたと思いますか。」と探す範囲を限定して問う。このように話すことで、生徒は今まで授業中読み解いてきた内容は、根拠のないものだとも言えるのか、と生徒の興味を引きたいと思う。

次に、まず、袁慆との再会までの1年間に考え続けた虎になった原因を「生き物のさだめ」と結論付け、まっさきに袁慆に答えたことを確認した後、「どうしてこの時李徴は自分の「詩への執着」や「己の非情さ」を最初に袁慆に語らなかったのだろう。」「つまり、袁慆と出会った直後はそのようなことが、頭に浮かばなかったのだろう。」と。だから「ところで、そうだ」という言葉で告白を始めているのだと。そして、この言い出しの印象を聞き、そこから読み取れること、すなわち、その後の李徴の告白が、その場の「ノリ」でふと思いついたという言い始めであることに生徒に発問しながら気づかせたい。だから、詩の伝録を依頼した後からここまでの告白の内容は、李徴が袁慆と出会ったからゆえ言葉にできているのではないかと。

そして「ところで、そうだ」という言葉以降の李徴の告白のどこに、自己劇化が強く表れているかを考えさせる。そのため李徴の告白を次のように6つに整理し、擬人法や比喻、対句等を指摘させる。

①袁慆と出会い、自身の正体を告げる部分

②自身が虎に変身し、その後残虐な行いをしてきたことを語る部分

古い宮殿の礎がしだいに土砂に埋没するように。

③人間だった時に創作した詩を伝録する部分

④人間だったころの内心を回想する部分

臆病な自尊心 尊大な羞恥心

己の珠にあらざるを惧れる…己の珠なるべきを半ば信ずる

瓦に伍する…

自尊心を飼い太らせる

人間は誰でも猛獣使いであり、…

この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。

人生は… 警句を弄しながら

胸を焼かれるような悔い

俺の毛皮のぬれたのは、夜露のためばかりではない

⑤妻子の面倒を依頼する部分

酔わねばならぬ時が(虎に還らねばならぬ時が)

⑥去り行く袁慆一行に振り返って自分を見てほしいと願う部分。

堪え得ざるがごとき悲泣の声

このようにまとめると、人間であった時の自分を回想している部分に修辞法が多いことが指摘されるだろう。

そのことは、李徴の感情が揺れ動き高ぶる④の部分に自己劇化にともなう、表現の特色があるのだと理解できる。そして、人と会話できる最後の機会にも自己を劇化して語らざるを得ない人間をどう思うか考えさせ、発表させて終わりたい。

### 3. 授業の最後に

小説教材の最後に感想文を生徒に書かせる国語教師は多いと思う。しかし、言い訳になるが、授業時間の合間には多忙な分掌業務や他の担当クラスの授業準備をこなし、19 時までの部活動指導を抱える中、一人一人の感想文を読んで適切な感想、批評を原稿用紙に記載する時間的余裕は私の場合なかった。書かせっぱなしになって生徒の次の機会に書く意欲を削いでしまうのは残念なことだ。そこで「山月記」に限らず、扱った教材の終了時には私が書いた感想文を生徒に読んでもらうことにしていた。例えば「山月記」の場合次のように。

どうして「山月記」は半世紀以上も高校の教科書に必ず載るのか。それは「自意識」の問題を真正面から扱っているからだだろう。「自分はどんな人間なのだろう」「人からどう思われているのだろう」「自分は何ができるのか、できないのか」など、誰でも特に 10 代のみんながよく考えることを李徴も考え、実に巧妙に語っている。そして大人たちは、この作品で君たち高校生に「自分自身を見つめなおしてもらいたい」などと余計なお世話をかきたいのだ。

でも実際にみんなはこの作品を読んでみてどう思った？「青春時代を空費しないように今を大切にしがんばろう」なんて思ったかな(笑)まあ、ほとんどいないだろうね。

それではこんな極端に生きることに不器用な人物を主人公にした小説を読む意味はなんだろう。

先生はこの作品を読んで矛盾したふたつの気持ちになった。一つは悩んだ末に人生を棒に振ってしまうなんて、実にばかばかしい、普通の生き方でいいと李徴を拒絶する思い。もう一つは普通の生き方をしないですんだ李徴がほんのわずかだがうらやましいという気持ちだ。

上から目線で李徴を見られるのになぜほんのわずかでもうらやましいのか。それは「普通に生きることも」もなかなかたいへんだと思うからだ。「普通に生きて」いてもつらいことや面倒なことは山ほどある。「普通に生きている」のに、どこか満たされていないという不幸な感情を自覚することすらある。だから、「普通でない」李徴がほんの少いうらやましいのだ。

ところで、その「普通に生きること」とは、どう生きることか、もう少し深く考えてみよう。ある人は言う。「一般的には生まれ落ちたこの社会の秩序を学び、仕事を選択して働き、多くの人が家庭を持ち、子どもを育て、老いて、そして死ぬことだ。」

「そして生きている間、いつも 4 つの「精神的な態度」を人はとり続ける。それは①家庭や学校、職場の周囲の人(秩序)を大切に思う「誠実さ」を持ち続けること。②自分の行動が他者に影響することを自覚し、自分の行動に「責任」を持ち続けること。③繰り返される毎日の退屈に耐えるための「目的意識・意欲」を持ち続けること。④そしてそういう毎日の中で直面する苦しみや不安から抜け出すための「知恵」を持ち続けること。」だと。なるほどと思う。特に③は大学受験浪人した僕には身につまされる。

しかし、これら「精神的な態度」を持ち続けることはどんなに困難なことだろう。たとえば、自分が誠実でも人に裏切られることがある。将来の目的を見つけられず、意欲が生まれないこともある。

このように「普通に生きること」にもつらさや困難が四六時中つきまとっている。だから僕は「普通に生きること」をせず、食欲さえ満たせば満足できる虎になってしまった李徴が、ほんの少～うらやましい。(自分はそうならないと思っているからで、李徴になるのはやはりいやだが)

さて、僕たち教師はみんなに「個性的に生きろ、自分らしく生きろ」と呪文のように唱える。そのために「意欲」や「積極性」を持っていう。しかし、そうした意欲や積極性は、人から言われたことをきっかけに心の内側から自動的に生じる単純なものでないことは、みんなもわかっているだろう。実のところ意欲や積極性というものは、いつもその人の置かれた周囲の状況に左右されるものなのだ。これも趣味や推し活、部活動を考えるとみんな納得できるだろう。

だから、「意欲」や「目的意識」とは、実は同じことを繰り返して退屈な僕らの毎日を、「個性的な生き方」に導くために、なんとか耐えきるための、「自分への言い聞かせ」、「自己暗示」の別名なのだ。今の自分とつながらない自分、まったく別な自分があるわけではないのだ。

それがわからないと、僕らも李徴のように今の自分ではない別な自分探しをしたあげくに、自分自身を見失って後悔してしまうだろう。「山月記」はそんなことをいつも僕に考えさせる。

少し長くなってしまったが、プリント授業をしていたことから、そういう場合は分けて生徒に配布した。そして心がけたのは決して説教臭くなく、生徒の抱えているであろう思いに沿い、ほんのわずかでも共感を得られるようにすることである。生徒の中には私の文章を楽しみにしていると伝えてくれた人もおり、書き甲斐があった。

作品への感想は何もしないと「おもしろい」「つまらない」「わくわくした」「眠たくなった」などとおおざっぱでぼんやりとした、深みのないものになりがちだ。そして多くの生徒が自分の受けた印象を掘りさげ、言語化することが得意ではないように思う。そこで、指導者の感想文を読ませることで自分が言葉に表すきっかけとなったり、知らなかった読み方、見かたの発見となったりかすることを期待したい。

そのためにも、改めて読後感の話し合いの時間を設けることしてみたい。その際のたたき台になる指導者の感想文とならないかとも考えている。

## 最後に

20年前、北海道教育大学札幌校修士課程で学ぼうと考えた理由は、国語の授業が講義形式になり、生徒の学習活動の場をなかなか設けられなかった反省から、生徒の読みの経験を交流できる授業を求めたいと考えていたからであった。

現在、その理想を現実のものにする可能性のある環境が整いつつある。すなわち、コロナ禍のピンチをチャンスに変えて、学校現場で児童生徒が一人一台端末を支給されたり、あるいは購入したりして、授業に参加している環境である。国語科の授業でどのように端末が利用されているか、学校現場から離れた私にはわからないが、身近にいる中学生に聞くと、ノートは使用せず各教科の授業はタブレットを利用しているという。利用の1つとして、紙媒体で紹介されていた古典資料や文学史の資料を、ネットを利用して児童生徒たちは調べているのではないかと想像するが、そのほかに、生徒の考えを端末に記させ、それを指導者が拾い出したり、生徒間で共有したりする実践も行われているだろう。今回まとめた山月記への気づきや授業改善にぜひこうした学習環境を取り入れた実践をしたいものである。

現場を離れてわずか5年ではあるが、私の述べた内容はすでに古い取り組みになっているかもしれない。それゆえ、お読みになられた方からの忌憚のないご叱正、ご意見を甘んじてお受けする覚悟である。拙文をお読みいただき心からお礼申し上げます。

(引用した作品本文は、インターネット版 筑摩書房「現代文」による。)

(かたやま かずよし／札幌市子ども未来局少年育成指導員・元札幌新川高等学校)